

粕屋町文化財調査報告書第 39 集

阿恵天神森遺跡第 2 地点

2016

粕屋町教育委員会

はじめに

本書は、共同住宅建築に伴い、平成26年度に粕屋町教育委員会が実施した、粕屋町大字阿恵字天神森に所在する阿恵天神森遺跡第2地点の発掘調査の記録です。

本遺跡の至近距離に、飛鳥時代から奈良時代に糟屋部の役所が置かれた阿恵遺跡があります。政庁・正倉・古代道路など、古代の役所跡の全体像を把握できる希有な事例であり、古代の地方支配体制を考える上で重要な遺跡といえます。阿恵遺跡が立地する微高地には遺跡が多く存在しており、近年の発掘調査件数が増加している地域でもあります。本遺跡に隣接する箇所においても、阿恵天神森遺跡第1地点・阿恵古屋敷遺跡など、古墳時代から奈良時代にかけての遺跡が存在しています。

このような立地環境のもと、本遺跡において6世紀から7世紀の遺構・遺物を確認したことは、阿恵遺跡の成立過程を考える上で貴重な成果であったといえるでしょう。しかしながら、遺跡全体のうちのわずかな範囲を調査したに過ぎません。遺跡がどのような性格であったのかは、今後の周辺地域の調査によって次第に明らかになっていくことと思います。

本書が郷土の歴史に誇りを持ち、文化財に対する理解を深める上で広く活用されるとともに、研究資料としても貢献できれば幸いです。最後になりましたが、発掘調査にご協力いただきました関係者の方々をはじめ、近隣住民の皆様から謝意を表します。

平成28年3月31日
粕屋町教育委員会
教育長 大塚 豊

目次

1 経過・位置と環境

- 1 調査に至る経過
- 1 調査体制
- 1 地理的環境
- 1 歴史的環境

3 調査成果

- 3 竪穴建物
- 4 掘立柱建物
- 4 土坑
- 8 ビット出土遺物
- 9 総括

11 図版

発行	粕屋町教育委員会
調査起因	共同住宅建築
現地調査	平成26年11月4日～平成26年12月22日
整理調査	平成27年6月26日～平成28年3月31日
使用方位	国土座標第Ⅱ系(世界測地系)
遺構実測	呉玉駿介・新宅信久
遺構撮影	呉玉駿介
遺物撮影	西垣彰博
遺物実測	呉玉駿介・福島日出海
製図	高橋幸作・松永メイ子・毛利須寿代
執筆	呉玉駿介
編集	西垣彰博

本書で使用した須恵器編年は、『牛頭原跡群—総括報告書1—』大野城市文化財調査報告書第77集 大野城市教育委員会2008を基準としている。

本書に関わる遺物・記録類は、粕屋町立歴史資料館にて収蔵・管理し、公開する予定である。

経過・位置と環境

飛鳥時代から奈良時代に造営された糟屋官衙の阿恵遺跡より100mの距離に本遺跡が立地する。また、古代官道推定線も近隣を通過している。

調査に至る経過

阿恵天神森遺跡第2地点の調査は、福岡県糟屋郡粕屋町大字阿恵字天神森289番地1において、平成26年9月12日に、共同住宅工事に伴う埋蔵文化財事前審査願書が提出されたことに起因する。当該計画地は平成6年度調査の阿恵古屋敷遺跡、平成7年度調査の阿恵天神森遺跡に隣接するため、同年10月3日に確認調査を実施したところ、現表土下約1mに柱穴等と見られる遺構が確認された。この結果に基づき協議を実施したが、基礎工事による遺跡の破壊が免れないため、記録保存の発掘調査を実施後に建築工事を着手することとなった。

発掘調査は、住宅建築部分約200mを対象とし、平成26年11月4日～平成26年12月22日の期間において実施した。報告書作成に係る遺物整理作業は、平成27年6月26日～平成28年3月31日で行った。出土遺物及び図面・写真等の記録類は粕屋町歴史資料館にて保管している。

なお、整理作業にあたっては、福岡大学武末純一教授・桃崎祐輔教授よりご指示をいただいた。また、地域住民のみならず、調査の主旨にご理解をいただきとともに、多大なご協力を賜りました。ここに記して感謝申し上げます。

調査体制

平成26年度（発掘調査）
調査主体 粕屋町教育委員会

教育長 大塚豊
教育委員会事務局次長 関博夫
社会教育課長 中中原浩臣
社会教育課文化財係主幹
新宅信久（調査担当）
同係長 西垣彰博
同係嘱託職員 池田拓、児玉駿介（調査担当）、高橋幸作、福島日出海、松永メイ子
発掘調査作業員 葛充雄、古賀秀康、小林正行、早野豊明、日野靖宏

平成27年度（報告書作成）
調査主体 粕屋町教育委員会
教育長 大塚豊
教育委員会事務局次長（前任） 関博夫
同（後任） 石山裕
社会教育課長 新宅信久
社会教育課文化財係長 西垣彰博
同係嘱託職員 児玉駿介（報告書担当）、高橋幸作、永島聡士、福島日出海、松永メイ子

地理的環境

福岡県糟屋郡粕屋町は、福岡市の東に隣接し、粕屋平野の中央に位置している。町域は14.13km²と小さく平坦な地形である。

粕屋平野の西は博多湾に面し、南側は太宰府市の四王山から伸びる月隈丘陵によって福岡平野と区分される。東側の三郎山系、犬鳴山系を源とする3本の河川が平野を貫流し、北から多々良川、須恵川、宇美川の順で博多湾に注いでいるが、山地から舌上に派生する丘陵が多く

伸びているため、沖積地は河川流域に限られている。また、平野の北側には立花山系があり、博多湾に面して周りを山地に囲まれた小さな平野である。

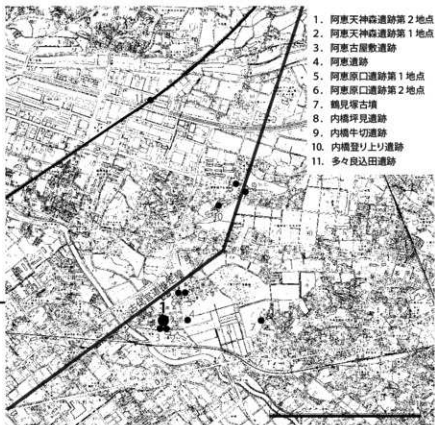
本遺跡は、粕屋平野のほぼ中央に位置し、須恵川下流域右岸の舌状丘陵先端に立地する。須恵川までの距離は約150m、標高は7m程度である。

歴史的環境

本遺跡の歴史的環境を記すにあたって最も重要なのは、東方約100mに位置し、広範囲に官衙遺構が確認されている阿恵遺跡との関係である。詳細は本文に依るが、今回の調査においても暗文を施した土師器類をはじめとする官衙との関連を想起させる遺物が出土している。

阿恵遺跡では、糟屋郡の政庁、正倉、古代道路関連遺構等を確認している。コの字状に建物配置される政庁と、14棟に及ぶ正倉群、古代道路の区別等、古代地方官衙の全容が判明する重要な遺跡の発見といえる。また、7世紀後半の評段の遺物が出土しており、阿恵遺跡が評の時代まで遡ることが確実となれば、698年の紀年をもつ妙心寺梵鐘（京都市）に見える「糟屋評造春米連弘國」との関係が指摘できる。文字資料による評造名、つまり評家の長官名と発掘調査により確認した評家の遺跡が一致する全国初の事例となる。

また、本遺跡の東方には、丘陵上に6世後平の前方後円墳である鶴見塚古墳（後円部半壊、推定全長80m前後）が座している。鶴見塚古墳は、近世地誌記

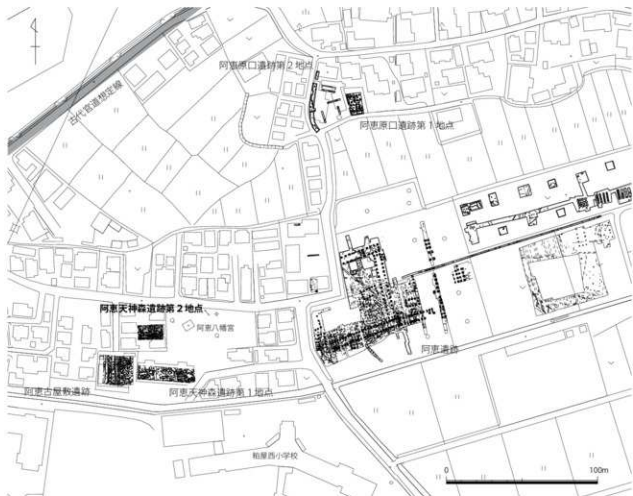


1. 阿恵天神森遺跡第2地点
2. 阿恵天神森遺跡第1地点
3. 阿恵古屋敷遺跡
4. 阿恵遺跡
5. 阿恵原口遺跡第1地点
6. 阿恵原口遺跡第2地点
7. 鶴見塚古墳
8. 内橋坪見遺跡
9. 内橋牛切遺跡
10. 内橋登り上り遺跡
11. 多々良込田遺跡

第1図 阿恵天神森遺跡第2地点位置図 (1/25000)

前国絵巻土記」に当時の測量寸法が記載されており、福岡市の東光寺剣塚古墳と墳丘規模が同じとされる。かつ、横六式石室の内部主体も共通しており（現在は消滅）、肥後地方の系譜をもつ石屋形が採用されていたようである。東光寺剣塚古墳は、比恵・那阿遺跡の那津官家に近接する立地から、官家管掌者の墓とも考えられていて、鶴見塚古墳との共通性は看過できない。

さらに、阿恵遺跡と谷を挟んで立地する阿恵原口遺跡では、政庁建物と方位を同じくする長倉型の掘立柱建物が検出され、近くには郡と大宰府を結ぶ官道推定線が通過している。本遺跡周辺は、阿恵遺跡を中心として官衙関連遺跡が密集しており、今後の周辺調査においては慎重を要する地域である。



第2図 阿恵天神森遺跡第2地点周辺図 (1/2500)

調査成果

調査地は、阿恵天神森遺跡第1地点。阿恵古屋敷遺跡に隣接している。古墳時代前期から中期にかけての竪穴建物3軒、古墳時代から古代の圓立柱建物2棟、7世紀後半から8世紀前半の土坑1基を検出した。

竪穴建物

調査区中央南端において3軒の方形竪穴建物を重複した状態で検出した。いずれも方位と東西幅は類似している。遺構の南半は調査区外のため未確認である。全体的に削平を受けており、深さは最大でも10cm程度しか残存していない。一軒毎に時期を把握するのは困難であるため、一定の時期幅を想定しておくが、後述の通り第1号竪穴建物の覆土中から布留系土器を確認しており、下限を示すものと考えられる。

第1号竪穴建物（第5図）

3軒のうち最も相対的に時期が新しく、第2号・3号竪穴建物を切る。東西幅は3.37mで、覆土中から布留系の土器が出土している。

第1号竪穴建物出土遺物（第6図）

1～8は第4層から出土した。1は土師器製の口縁部。口縁端部は丸みを帯びる。内外面ともにヨコナデ。口径13.6cm前後。2は布留系製。口縁端部はやや角ばり、沈線状に窪む。器壁厚は3～4mm程度と薄手である。口縁部はヨコナデ、胴部内面はハラケズリ、外面は斜位のハケを施す。口径13.0cm前後。3は土師器製の口縁部。内面はヨコハケ、外面はタテハケを施す。4は土師器製。体部外面にタテハケ、内面にヨコハケを施す。5、6は複合口縁壺。5は内外面ともにヨコナデを施す。6は内外面ともヨコナデで仕上げるが、指オサエとハケメが残る。7は土師器杯の口縁部。内面は



第3図 阿恵天神森遺跡第2地点調査区設定図 (1/400)

斜位のハケ、外面にはナデを施す。8は土師器の高坏脚部。底部に穿孔があり、内面にはナデ、外面にはタテハケを施す。

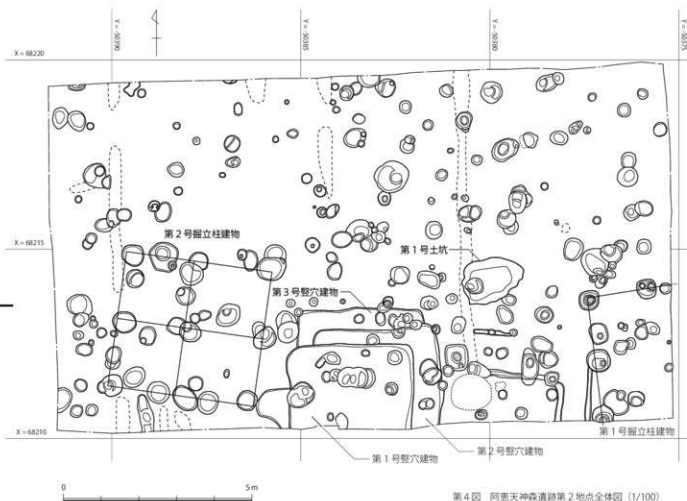
9～13は第5層から出土した。9は土師器製の口縁部である。内外面にヨコナデを施す。10は土師器製の口縁部。内外面にヨコナデを施す。11は土師器製。口縁端部は強いヨコナデによる面取りで一部粘土がはみ出している。内面はヨコハケ、外面はタテハケを施す。12は土師器鉢の口縁部である。外面の一部は斜位のヘラナデで、内面は斜位のハケメを施す。13は土師器高坏の坏部。調整は器面が磨れているため不明。

第2号竪穴建物（第5図）

第1号竪穴建物に切られ、第3号竪穴建物を切る。東西幅は3.3mである。

第2号竪穴建物出土遺物（第6図）

14は土師器製の口縁部。強いヨコナデにより上方に端部が断面三角形形状に突出し、端面には凹線状の窪みができる。内外面にハケメ痕がわずかに残る。15は土師器器台脚部。内面には指オサエが残る。16は砂岩製の砥石で、被熱を受けて破損している。長5.3cm、幅5.0cm、厚1.2cmを測る。



第4図 阿恵天神森遺跡第2地点全体図 (1/100)

第3号竪穴建物 (第5図)

第1、2号竪穴建物に切れ、3軒の竪穴建物のなかでは最も古い。東西幅は3.35mである。実測可能な遺物は1点しか出土していない。

第3号竪穴建物出土遺物 (第6図)

17は土師器鉢の口縁部。内面にヨコハケ、外面にヨコナデを施す。

2×2間以上の側柱建物となり、柱間は150cmと180cmのものがある。建物方位はN-7°-Wである。遺物は土師器と須恵器の細片を確認したのみで、時期比定に足る資料は検出できなかった。

第2号掘立柱建物 (第8図)

調査区南西で検出した2×2間の総柱建物である。柱穴は円形で、掘方の直径は50cm程度を測る。深さは、第1号掘立柱建物と同様に、最大で60cm程残存している。柱間は180cmと210cmがあり、建物方位はN-81°-Wである。

第2号掘立柱建物出土遺物 (第9図)

18は須恵器坏身。底部に回転ヘラケズリを施す。牛頭編年IV A期。19は須恵器甕の胴部。意図的に長方形に打欠かれ、内面は磨って平滑にしてあることから、転用甕の可能性が高い。長5.7cm、幅4.1cm、厚0.8cmである。20は土師器

甕の口縁部片。6世紀後半の所産と思われる。内外面ともに表面は剥落しており調整不明。21は弥生土器の裏の口縁部で頸部はくの字状を呈し、口縁部には強いヨコナデを施す。弥生時代後期後葉の所産と考えられる。ただし、頸部からわずかに下の部分に明確な三角突帯を貼り付け、また、口縁部のハケ調整をナデ消そうとしているなど古相的属性も看取される。

22は門石。全面に敲打痕が残る。長8.9cm、幅4.8cm、厚2.6cm。23は滑石の原石で、台形状を呈し、長2.8cm、幅2.1cm、厚1.0cmを測る。

掘立柱建物

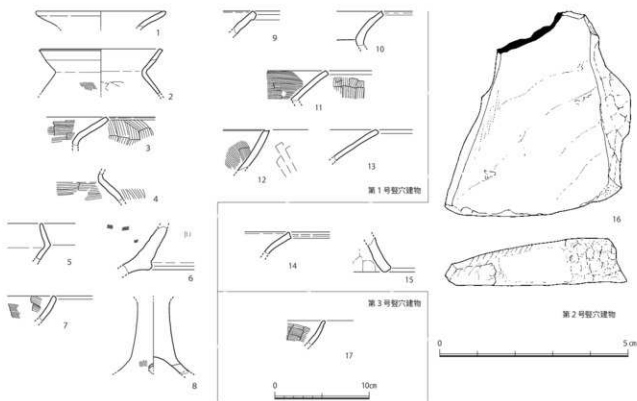
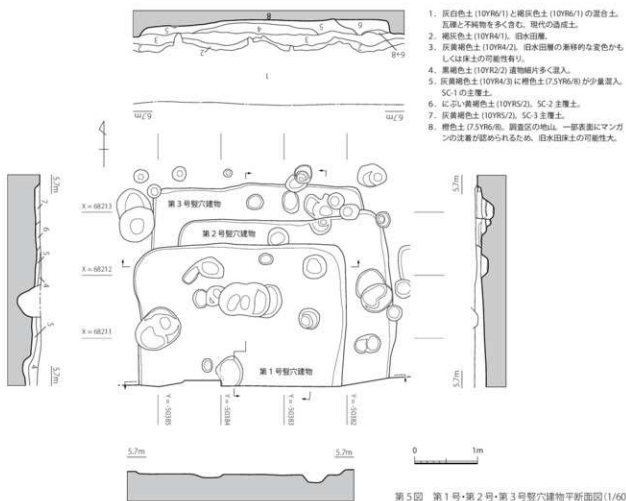
第1号掘立柱建物 (第7図)

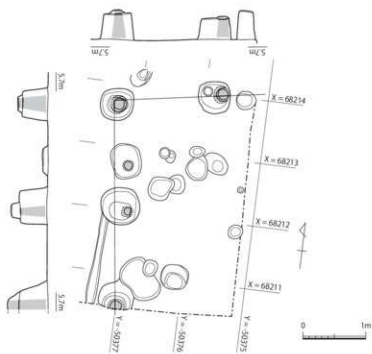
調査区南東隅において、建物の北西隅にあたる部分を検出した。柱穴は隅丸方形で、掘方の最大直径60cm、深さは最大で60cmを測る。

土坑

第1号土坑 (第10図)

調査区中央東寄り検出したいびつ

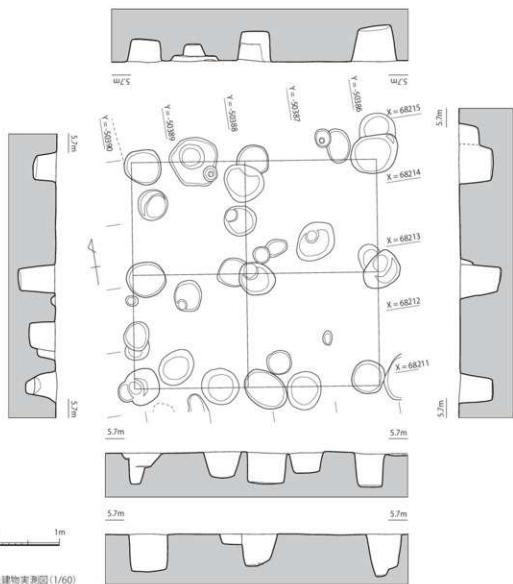




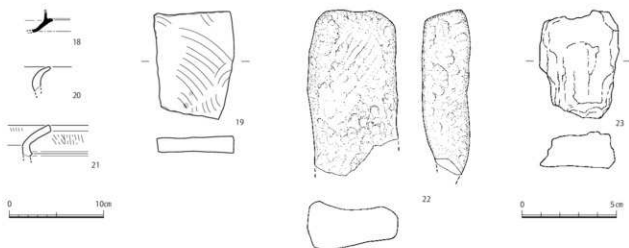
第7図 第1号掘立柱建物実測図(1/60)

な楕円形を呈する土坑である。後代の削平の影響で遺存状態が悪い。長軸1m60cm、短軸1m10cm、深さは最大15cmを測る。埋土は多量の焼灰を含み、多くの遺物は基底部から浮いた状態で出土した。基底部は不規則な凹凸が多く確認され、整形して掘削された遺構とは異なることから、廃棄用に掘削されたものと考えられる。

出土遺物には、暗文を施した畿内系土師器の盤をはじめ、木質の残る刀子や転用碗など官衙関連のものが含まれており、直線距離で100mも離れていない阿恵遺跡との関わりを窺わせる。時期は、出土遺物から牛頭編年VI期～VII A期の所産とみられ、阿恵遺跡の政庁の時期と符合する。また、手捏ね土器や土師など祭祀的な遺物もみられる。官衙関連遺物



第8図 第2号掘立柱建物実測図(1/60)



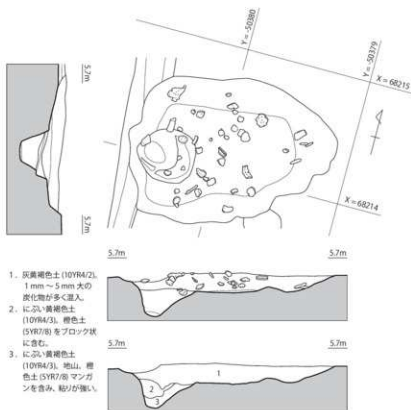
第9回 第2号獨立柱建物出土遺物実測図 (1/4、1/2)

を含む祭祀が行われた後、それらを廃棄した土坑の可能性を指摘しておきたい。

第1号土坑出土遺物 (第11回)

24～39は須恵器で、24～35は坏蓋。24～26は、かえりが体部より下方に出る。26は焼き歪みによる変形が著しい。30～33は過渡的な形態で、かえりが体部に取まる。30はかえりが退化傾向である。31は端部が若干肥厚し、かえりが小さく断面三角形状を呈する。32は口縁端部が内側に折れ曲る。33はかえりが小さく退化傾向である。34～35は端部を嚙状に折り曲げる。36、37は高台付坏。36は、須恵器内底面の器壁が磨いたように滑らかで、その部分に明瞭ではないものの黒が付着したような黒い痕跡がある。また、高台周辺の割れ口は、意図的に割って整形したものと考えられ、逆にした際に地面と接する割れ口が摩滅している。天地を逆にして置き、高台の内側を硯として使用した転用硯の可能性が考えられる。底径9.8cmを測る。38、39は鉄鉢かその先行的形態をなすものと考えられる。胴部の張り口縁近くのかなり高い位置でピークを迎えるものの、そこから僅かに内湾し最終的に端部は軽く外反する器形。以上の特徴から鉄鉢形と判断したが、かなり小型で器壁は薄い。

40～50は土師器で、40～42は土師器蓋。40は精良な胎土を用いており、口縁端部は内湾し、玉縁状に段をなす。また、明瞭な放射状の暗文が観察される。畿内系。口径23.2cm前後、胴高2.9



第10回 第1号土坑実測図 (1/30)

cmを測る。41、42はいずれも口縁部と底部に明確な稜はなく、内面も緩やかにカーブを描く。また、不明瞭ながら、41の内面にナデ後放射状の暗文が観察できる。いずれも外面の調整は摩滅により不明瞭。胎土は良質と言いがたく、畿内系の土師器を模した在地の土器と考えられる。器高2.2cm。43は土師器無頸壺。口縁部の内外面にヨコナデを施す。

44～46は土師器甕。44は頸部内面に明確な稜をもつ。調整は摩滅のため不明。45は口縁部内面はヨコハケで、胴部内面はヘラケズリを施す。頸部外面はタテハケ。46は頸部で強く屈曲し、内面に明瞭な稜をもつ。口縁部内外面はヨコナデ、胴部は内面がヨコハケで外面はタテハケを施す。47は長頸の高杯頸部。外面にタテハケを施す。48は甕。体部外

面はタテハケを施し、内面はヘラケズリである。把手は指オサエおよびナデによる整形。49、50は鉢形の手握土器。胎土に3mm程の砂粒を多く含む。いわゆるミニチュア土器ではなく、粗雑なつくりの手握土器である。49は口径5.3cm、器高3.7cm。50は口径5.5cm、器高2.8cmを測る。

51～53は土錘。いずれも完形品であり、エンタシス状の形態を呈す。使用された痕跡は少ない。51、52は表面に指オサエの後ナデを施す。51は長7.7cm、幅2.1cm、孔径0.6cm。52は長6.85cm、幅2.0cm、孔径0.35cmを測る。53は表面に粘土のしぼり痕が螺旋状に観察できる。表面はナデによる調整。長7.1cm、幅1.85cm、孔径0.4cm。

54は刀子。切先の一部を欠き、茎部に木質が遺存する。残長11.5cm、幅1.1cm、背厚0.4cmを測る。

ビロ出土遺物(第12図)

55～67は須恵器。55、56は初期須恵器。55は高坏の坏部であり、精緻な波状文を施す。56は椀で、器壁は薄く、若干内側に屈曲する器形で、外面には三角突帯を2条巡らし、その下に精緻な波状文を描く。波状文の下位にも突帯を施す。古墳時代中期の所産。

57～64は坏蓋。57～60は口縁端部内面にかえり状の段をもつ。57は口径12.7cm前後を測る。57、58は6世紀前半の所産。60は外面に沈線、内面口縁端部に明瞭な段をもつ。牛頸編年ⅢB期、6世紀後半の所産であろう。61は天井部に段をもつ。62は天井部にヘラ記号が刻まれる。口径10.8cm、器高3.6cmを測る。牛頸編年ⅣB期。63は牛頸編年Ⅴ期。64は嚙状口縁。内面の口縁端部には明瞭な屈曲が認められる。特に口縁端部は強いナデ。牛頸編年ⅦA期新相、8世紀前半。

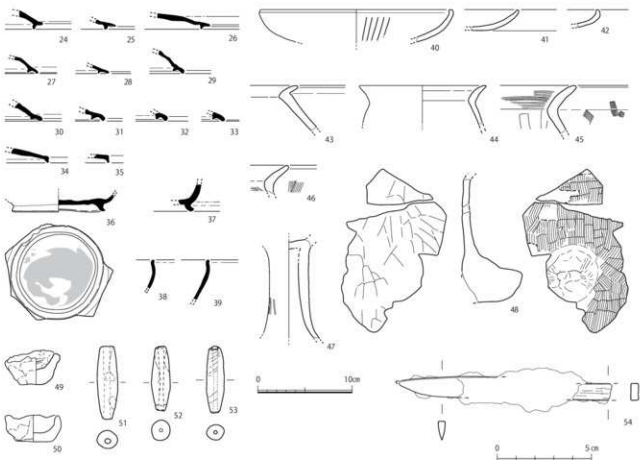
65、66は坏身。65は厚みのある大ぶ

りなもので、口縁部はほぼ直立する。6世紀前半から中頃の所産。66は内外面とも回転ヨコナデである。牛頸編年ⅢB期、6世紀後半。

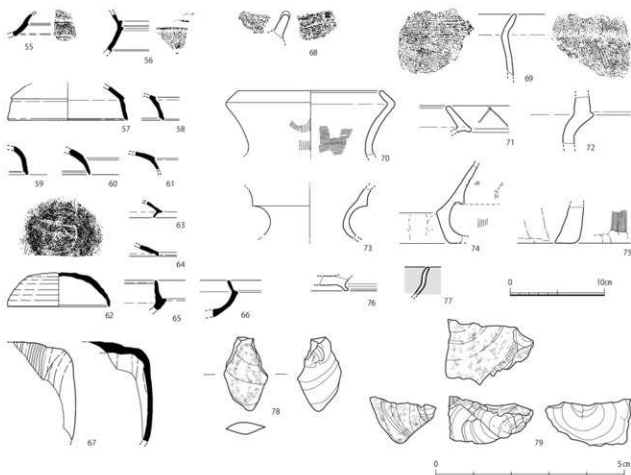
67は横瓶で、外面にカキメ、回転ヘラケズリを施す。

68は縄文土器の鉢である。北久祖山式、縄文時代後期。外面はナデ。69は弥生時代末～古墳時代初期にかけての在地系産の甕。緩やかなくの字口縁で長胴気味。口縁部から頸部にかけてタテハケ、胴部にはヘラケズリを施す。内面は、口縁部から胴部にかけてタテハケ、胴部はヘラケズリ。70～72は弥生時代後期の複合口縁甕。70は口縁部に明瞭な稜が見られる。頸部内面にヨコハケ、外面にタテハケを施す。口径15.2cm前後。71は器面の状態が悪いため調整不明。72は内外面ともにナデだが、外面にわずかにタテハケが消え残る。

73、74は土師器の複合口縁甕で古墳時代前期。73は内外面ともヨコナデ。74は頸部内面に明瞭な段を形成し、指オサエが残る。頸部外面は縦方向のヘラ



第11図 第1号土坑出土遺物実測図(1/4、1/2)



第12図 ピット出土遺物実測図 (1/4, 1/1)

ミガキ。口縁部内面にも一部ヘラミガキが確認できる。

75は土師器の移動式カマド底部片。外面はタテハケ及び指オサエ。内面は強い指オサエ。接地面はナデ。

76は土師器の高台付杯。小さな高台が外部へ強く張り出す。7世紀末か。77は黒色土器B類碗。内外面にミガキを施す。10世紀代か。

78、79は玉造関連資料でいずれも碧玉。78は形割段階の未製品。平面三角形で一方の小口が切断されない段階のもの。横断面は三角形を呈す。長2.0cm、幅1.2cm、厚0.3cmを測る。79は碧玉加工段階で生じた縦長剥片。長2.2cm、幅1.2cm、厚1.2cmである。80、81は砥石。80は焼熱を受けた砥石品で、石材は不明。長18.2cm、幅11.1cm、厚6.5cmを測る。81は砂岩性で、扁平気味な円礫の3面を使用している。長15.4cm、幅9.8cm、厚6.2cmを測る。

総括

本遺跡に隣接する阿恵天神森遺跡第1地点並びに阿恵古屋敷遺跡の調査成果もふまえ、須恵川下流域右岸の舌状丘陵上に立地する遺跡全体を視野に入れながら調査成果を概括したい。

竪穴建物についてみると、阿恵天神森遺跡第1地点並びに阿恵古屋敷遺跡の調査では、5世紀中頃から7世紀に至るまでの竪穴建物を確認している。本遺跡では、古墳時代前期の竪穴建物の重複を確認できた。遺跡が立地する丘陵の生活痕跡も一層よく見ることが可能であろう。ただし、これらの遺構の時期に関しては、現段階では空隙があり、今後の周辺調査の進展によって、連続性や空間動態などが次第に明らかになることを期待したい。

なお、今回の調査では、古墳時代中期以降の竪穴建物は確認できなかったものの、該期の遺物自体は確認しており、なかでも精緻な波状文を施した初期須恵器

は目を引くものである。

2種検出した掘立柱建物については、時期比定に足る遺物を確認できなかった。建物の柱穴になり得るようなものを他にも確認しているが、調査範囲が狭小であることから全体を把握することが難しく、掘立柱建物として認定するまでは至っていない。

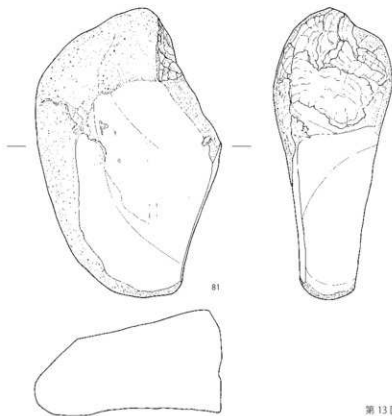
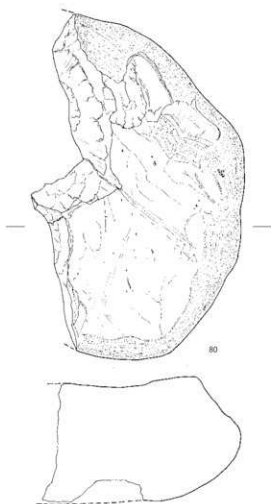
遺物がまともに出てきた土坑は、7世紀後半から8世紀前半の祭祀遺物を遺棄した廃棄土坑の可能性を考えている。精緻な暗文が施された畿内系土師器の盤・木製の残る刀子・転用碗などの官衙関連遺物と、手捏土器や土唾などの祭祀関連遺物があることから、官衙関連遺物を伴う祭祀を行った後に、使用した器物を廃棄したのと思われる。

近接する官衙遺跡である阿恵遺跡との関わりについて触れておきたい。本遺跡が立地する低丘陵上には、弥生時代終末から古代までの竪穴建物が断続的に分布していることが明らかとなった。阿恵遺跡に官衙建物が登場する以前の、前身的

集落の様相が明らかになりつつある。ミヤケの時代に含まれるものもあり、今後の周辺調査には注意を要する地域である。

阿忠遺跡の詳細は、近年刊行予定の報告書に依ることとするが、阿忠遺跡自体はさほど多くの遺物が出土しているわけではない。本遺跡の土坑から7世紀後半から8世紀前半にかけての遺物がまとまって出土したことは、一定の重要性をもつと考えられる。また、畿内系土師器の壺、転用硯とみられる須恵器、刀子など、官衙との関係を示すものもみられる。

今回の調査は、狭小な範囲ながら大きな成果を上げることができたといえよう。本遺跡が立地する船屋平野は、多々良川、須恵川、宇美川の3つの河川が併流しており、古代においては多々良川の河口は入江状に内湾していたと考えられている。また、付近を大路である大宰府路が通過しており、河川・海上・陸上交通の要衝であったことが分かる。近年の発掘調査では、このような地理的環境を背景とした古代の重要遺跡が、本遺跡周辺で相次いで発見されており、今後の周辺調査の進展に期待したい。



第13図 ビット出土遺物実測図 (1/2)

図 版



調査区全景 (西0-5)



調査区全景(北から)



第1号～第3号竪穴建物定礎状況(北から)



第1号土坑遺物出土状況(南から)



79(ピット)



78(ピット)



51, 52, 53(第1号土坑)



49, 50(第1号土坑)



62 (ピット)



62 ヘラ記号 (ピット)



19(第2号孤立柱建物)



36(第1号土坑)



56 (ピット)



54(第1号土坑)



80 (ピット)

報告書抄録

ふりがな	あえてんじんもりいせきだい 2 ちてん							
書名	阿恵天神森遺跡第 2 地点							
シリーズ名	粕屋町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 39 集							
編著者名	児玉駿介、新宅信久、西垣彰博							
編集機関	粕屋町教育委員会							
所在地	〒 811-2314 福岡県糟屋郡粕屋町若宮一丁目 1 番 1 号							
発行年月日	2016 年 3 月 31 日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
阿恵天神森遺跡 第 2 地点	福岡県糟屋郡粕屋町 大字阿恵字天神森 289 番 1	403491	280231	33° 36' 50"	130° 27' 25"	2014.11.6 ～ 2014.12.22	約 200㎡	共同住宅建築
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
阿恵天神森遺跡 第 2 地点	集落	弥生時代 ～ 飛鳥時代	竪穴建物、掘立柱建物、 土坑等	弥生土器、須恵器、 土師器、石器、鉄器				
要 約	<p>須恵川下流域右岸に形成された舌状丘陵先端に立地し、古墳時代の竪穴建物 3 軒・掘立柱建物 2 棟、飛鳥時代の土坑 1 基を検出した。隣接する阿恵天神森遺跡第 1 地点・阿恵古屋敷遺跡から遺構が広がっていることが考えられる。なお、東方 100m の地点には、飛鳥時代～奈良時代の官衙遺跡である阿恵遺跡があり、当遺跡の土坑からは官衙との関連が示唆される遺物が出土している。</p>							

阿恵天神森遺跡第 2 地点 粕屋町文化財調査報告書第 39 集

平成 28 年 3 月 31 日 発行

発行 粕屋町教育委員会
〒 811-2314 福岡県糟屋郡粕屋町若宮一丁目 1 番 1 号 (粕屋町立歴史資料館)
TEL: 092-939-2984 FAX: 092-938-0733

印刷・製本 株式会社九州カスタム印刷
〒 812-0007 福岡県福岡市博多区東比恵 3 丁目 16-15
TEL: 092-414-7554 FAX: 092-414-7560